

組織的調査研究活動推進事業(風間浦村下風呂地区)

仲村 俊毅・大川 光則・黄金崎栄一・菊谷 尚久

は じ め に

本事業は当初、昭和60～61年の2カ年にわたり、国庫補助により実施する予定であった。しかし、昭和60年度をもって補助が打ち切りとなったため、昭和61年度は県単事業として実施した。もちろん、調査規模は大巾に縮小された。本事業での調査項目は、(a)漁民意識アンケート調査、(b)漁家経営実態調査、(c)漁業情報利用状況調査の3項目であるが、(a)、(b)については昭和60年度に実施し、すでに報告済である⁽¹⁾。昭和61年度は漁業情報利用状況調査を行った。

調 査 内 容

1. 調査時期：昭和61年5月～同10月
2. 調査場所：下北郡風間浦村下風呂地区
3. 協力機関：大畑地方水産業改良普及所 横谷要一・木村 大
風間浦村役場
下風呂漁業協同組合
4. 調査方法：スルメイカの漁期にあたる5月～9月の間、人工衛星画像による津軽海峡東口周辺の詳細海況情報、及び当該発行の“ウオダス”漁海況速報を送付し、これ等の情報の利用状況、問題点等についてアンケート調査を行った。但し、人工衛星画像による詳細海況図は天候等により、この期間、2回しか送付できなかったため、アンケート調査は“ウオダス”速報のみに限った。

調 査 結 果

1. アンケート調査結果

アンケート調査の対象者はイカ釣漁業を主とする。漁家経営実態調査の対象者と同じく、10名である。この10名に対し、5月～9月の間、“ウオダス”速報を直接、自宅へ送付し、アンケート調査への回答を依頼した。

アンケートの様式を付表に示した。

以下に回答の内容を記述する。

5月から9月までの全期間を下風呂港やその周辺で、スルメイカ釣を含む各種漁業に従事した人は10名中3名であった。他は日本海の初漁期に、秋田沖へ回航し、イカ釣を行う例が多いが、遠くは石川、新潟、山形まで回航する人もある。時期はおおむね6月いっぱいか、遅い人でも7月中旬までで、それ以降は下風呂周辺でイカ釣を行っている。

“ウオダス”速報をどのくらい利用したか。という設問に対し、10名全員が毎回見ていると答えている。もちろん、毎回といっても下風呂港を基地としている時期に限ってのことであろう。

速報の伝達手段として、直接、自宅へ送付という方法を採用した以上、“見る”だけなら毎回“見る”のは、むしろ当然であって、設問自体がややナンセンスであったかもしれない。

役に立ったかどうかの設問に対しては、役に立った、が7名、参考程度にはなった、が3名であった。この設問はあまりに抽象的に過ぎ、回答の結果を評価するのは困難である。

内容は何が一番役に立っているか、という設問に対しては、

イ. 定置水温	3
ロ. 沖合水温	2
ハ. 人工衛星による潮境の位置	2
ニ. 県内の漁況	8
ホ. 県外の漁況	9
ヘ. 日本海スルメイカ情報	9
ト. 太平洋スルメイカ、アカイカ情報	3
チ. スルメイカの話などの魚の生態	2
リ. トピックス	3
ヌ. 試験船の情報	7
ル. 累積漁獲量	2

という内訳になった。“ウオダス”速報の意義を評価するに当たり、この項が最も重要と考えられるので、内容の検討は後述する。

今後とも必要と思うか、という設問に対しては、10名主員が引き続き利用したいと答えており、ある程度の評価を受けていることの表われであろう。

発行期間については、今まで通り5日間隔と答えた人が6名、2～3日間隔が良いと答えた人が4名となっており、情報伝達の迅速化への要望がある。

内容について、県内各地の漁獲量を知りたい、という希望があったが、“ウオダス”速報には漁獲量を記載しており、アンケート調査ではその真意を計りかねる。また、スルメイカの漁場別漁獲量を知りたいという希望があるが、これはおそらく、港への水揚げ漁獲量ではなく、正確な漁場位置を知りたいということと思われるが、現状では標本船に頼る以外になく、その標本船も自分でみつけた漁場を他に教えたがらないという事情もあって、希望に沿うのはむずかしい。

2. “ウオダス”漁海況速報について

“ウオダス”漁海況速報は昭和60年4月から発行されており、その概要については報告済⁽²⁾である。もちろん、その内容については今後、より充実を図っていかねばならないが、そのためには一般漁業者に、どのように受けとめられているか、を知らねばならない。そこで、ここではアンケート調査の設問の4に対する回答結果について詳述する。もとより、対象者はわずかに10名であることや、イカ釣漁業であることによる結果の片寄りはあるが、情報の伝達方法としては直接送付という方法をとったので、回答内容の信頼性は高いものと思われる。

回答内容については前述したとおりであるが、特徴的なことは、海況に関する情報が比較的に利用されていないことである。伝達され、理解され、利用されなければ情報としての価値がないこ

とを思えば、重要な問題と思われる。しかし、海況に関する情報が利用しにくいという声は、かなり一般的にみられる⁽³⁾。これには、伝え手側において海況と漁況との関連性を十分に把握し切れていないという一面と、受け手側の理解力という二面の問題を含むが、岩手県で実施している「海況相談日」などは、海況に関する知識の普及を図るという意味でユニークな試みであろう⁽⁴⁾。

県内外の漁況、日本海スルメイカ情報等にはきわめて関心が高い。当然、漁業者にとって最も関心のある情報でもあり、スルメイカ初漁期には日本海へ回航してイカ釣を行う人が多いことからもうなずける結果である。

魚の生態等が役に立ったと答えたのは、前年（昭和60年）のスルメイカ不漁により、早々とイカ釣に見切りをつけ、他種漁業へ切り換えた人であった。このような情報の利用価値は、受け手側の問題意識の有無によっても大きく左右されるのであろう。

試験船の情報に対する関心が意外に高い。これは、試験船の場合、民間船が操業していない海域でも操業するため、漁場操業への期待感によるものと思われる。

お わ り に

今回の調査は、対象者がわずかに10名ということで、不十分なものではある。しかし、漁業者が真に何を望んでいるか、ということ把握することなしに漁海況情報の質的向上は望めないことを思えば、何らかの意義はあったであろう。今後、このような調査や、直接面談等により、漁業者のニーズ把握に努める必要がある。

参 考 文 献

- (1) 仲村 俊毅 他（1985）組織的調査研究活動推進事業 本誌 昭和60年度 P.P.78－85
- (2) 十三 邦昭 他（1985）漁業情報利用開発試験 本誌 昭和60年度 P.P.11－15
- (3) 中村 勇一 （1986）漁海況情報の利用法について 昭和60年度東北ブロック水海連会報
- (4) 仲村 俊毅 漁海況情報の伝達・交換に関する問題点 昭和61年度東北ブロック水海連会報
(印刷中)

付 表

“ウオダス”漁海況速報アンケートについて

青森県水産試験場

1. 今年（昭和61年）の５月から９月までの間、どこで漁をしていましたか。
 - イ．下風呂港（時期： ）
 - ロ．他 港（港の名と時期を記して下さい。）

2. “ウオダス” 漁海況速報をどのくらい利用しましたか。
 - イ．毎回見ている。
 - ロ．ときどき見ている。
 - ハ．ほとんど見ない。

3. この速報があなたにとって役に立ちましたか。
 - イ．役に立った。
 - ロ．参考程度にはなった。
 - ハ．役に立たない。
（その理由 ）

4. 内容は何が一番役に立っていますか。
 - イ．定置水温
 - ロ．沖合水温
 - ハ．人工衛星による潮境の位置
 - ニ．県内の漁況
 - ホ．県外の漁況
 - ヘ．日本海スルメイカ情報
 - ト．太平洋スルメイカ、アカイカ情報
 - チ．スルメイカの話などの魚の生態
 - リ．トピックス
 - ヌ．試験船の情報
 - ル．累積漁獲量

5. 今後とも必要と思いますか。
 - イ．引き続き利用したい。
 - ロ．これから利用したい。
 - ハ．必要でない。

6. 今後どのような内容のものを望みますか。
具体的に記入して下さい。

7. 発行期間について

イ. 今までどおり 5 日間隔でよい。

ロ. 2 ～ 3 日間隔でよい。

ハ. 週報がよい。

ニ. 旬報がよい。

8. あなたの氏名、年齢

氏 名

年 齢

歳

9. その他について、希望または意見がありましたら述べて下さい。